

前奏	黙想	祈禱	
招詞	ヨエル書 2:12~13	讚美歌	529 ああうれし、わが身も
讚美歌	30 あさかぜしずかにふきて	献金	
祈禱		讚詠	547 いまささぐるそなえものを
信仰告白	使徒信条 566	黙禱	
聖書	創世記 3:17~19	主の祈り	564
	マルコによる福音書 10:32~34	頌栄	539 あめつちこぞりて
讚美歌	514 よわきものよ	祝禱	
説教	『“灰”である所から出発』	後奏	

今年の復活祭は 4/20、その 40 日前が四旬節(日曜日は数えない)。四旬節(レント)は今週 3/5 に始まりその日を「灰の水曜日」と呼ぶ。「灰」の由来は西方教会の暦にあるだけで、聖書的な根拠はない。神がアダム(人間)に語った言葉。「お前は顔に汗を流してパンを得る、土に返るときまで。お前がそこから取られた土に。塵にすぎないお前は塵に返る(創世 3:19)」。働いてやがて灰になる人間。だからといって虚無なわけではない。人間とは自らを生涯「耕し続ける(3:23)」者。「灰=塵」に返るとしても、私たちは未知なる自らを耕し続け、イエスと共に十字架へ向かい(マルコ10:33)、遂には復活に与る。

聖書に根拠があるわけでもなく、東方教会の暦にはない「灰の水曜日」。しかし復活へ向かうには、「灰=塵に返る者」である所から旅立つことは案外重要ではないか。人間はローマ帝国のような力や栄誉、繁栄や富に囚われている。だから「灰」である所から復活へと、私たちは出発するのだ。

イエスが三度目の死と復活を予告した(10:33~34)直後、兄弟漁師の弟子ヤコブとヨハネが抜け駆けして奇妙なことを願ひ出る。「栄光をお受けになるとき、わたしどもの一人をあなたの右に、もう一人を左に座らせてください(10:37)」。そんな抜け駆けに対し、他の弟子は「腹を立て始めた(10:41)」。つまり福音書は、十二弟子全員が「同じ穴のムジナ」だと言う。はじめの受難予告の時はペトロがきつく叱責されたが(8:33)、今度はヤコブとヨハネだ。そしてイエスは改めてはっきり語った(10:42)。

お前さんたちはローマ帝国のようであってはいけないよ(10:42~43)。「偉くなりたいた者は、皆に仕える者になり、いちばん上になりたい者は、すべての人の僕になりなさい(10:43~44)」。とはいえ、こんな極端な戒め、栄誉や力を内心欲している弟子たちには、理屈としても想像としても腑に落ちないだろう。とりわけ「人の子は~多くの人の身代金として自分の命を献げるために来たのである(10:45)」は何を言っているのかまったく不可解。しかし身に迫って来る「危うい空気」だけは肌を感じていた。

「一行がエルサレムへ上っていく途中、イエスは先頭に立って進んで行かれた。それを見て、弟子たちは驚き、従う者たちは恐れた(10:32a)」。驚愕する弟子たちの表情を丹念に思い浮かべると、周囲のただならぬ空気が、私たちにもビビッと感じられる。弟子たちが躊躇・逡巡する中、イエスお一人だけが迷いなく(この時点では)、先頭を歩いて行く。もしかするとヤコブとヨハネは、この重苦しい不安から何とか逃れたくて、心の底に渦巻く本音をつい口走ってしまったのかもしれない。

「イエスは再び十二人を呼び寄せて自分の身に起ころうとしていることを話し始められた(10:32b)」。

「人の子は三日の後に復活する(10:34)」にしても、その前が実におぞましい(10:33~34)。イエスの弟子たち、言い換えれば私たちキリスト者は、この「エルサレムへの道」をイエスに従って歩む者。「人の子は仕えられるためではなく仕えるために~来た(10:45)」。だから私たちも「仕える」道を進む。

力や栄誉を求めることは世の常であろう(10:42)。だが「皆に仕える者、すべての人の僕(10:43~44)」となるキリスト者にそれらは無縁、どころか妨げになる。だから弟子たちのような恐れ(10:32)が、私たちにも必要なのだ。でも大丈夫、イエスが一緒だから、つまずきながらも十字架へ必ず辿り着く。

イエスに従う道は危うい すべての人の僕になる道は権力を欲するより危険 秩序を壊す事だから
外側からの力によるものではない 人の内にキリストの愛が着火し 栄誉の壁は燃えて 灰となる

本日礼拝後に役員会を開きます。カレーの日です。どなたでも遠慮なくお召し上がりください。

3/5(水)1:00~3:00 教会カフェ。3/8(土)1:30~3:00 聖研・祈祷会。今年度の教会総会は4/27(日)。

礼拝堂・集会所の住所：408-0012 山梨県北杜市高根町箕輪 2265-3

連絡・問い合わせは牧師へ：408-0205 北杜市明野町浅尾新田 1324 TEL 0551-25-4008

eメールは komechan.olive@gmail.com HP は「日本基督教団八ヶ岳教会」で検索して下さい。